SCJ 50

四川　心のケアのこと

世界中の“ありがとう”

ナチュラルサイエンスの小松氏

父親になった吉田スタッフ



Cover Story
[表紙]



「もうすぐ本番です」。今年5月31日、四川省安県の文化広場。大地震から約1年経ったこの日、鮮やかな衣装を身にまとった子どもたちは、大勢の観客の前で踊りを披露しました。詳しくは中国の活動報告をご覧ください。

About Booklet
この冊子について

皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい——。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。

SCJ 50

Contents

4 [SCJ Report] 活動報告：中国
中国・四川での心のケア

8 [From Children] 子どもたちからあなたへ
世界中の子どもの笑顔をお届けします

10 [Toy Box] 中国のおもちゃ箱

11 [Stakeholder Interview] 特別インタビュー
株式会社ナチュラルサイエンス
代表取締役 社長 小松令以子氏 インタビュー

12 [Staff Episode] SCJの一員として
事業部 アジアII 吉田克弥

14 [Topics] [Information]

15 [World's Picture] どうしても載せたかった写真

発　行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
Phone 03-6859-0070（代表）

印刷協力：株式会社コア（この冊子は、株式会社コアのご協力により印刷・製作しています）

[スタッフ]
デザイン・編集：株式会社ピーアールハウス

SCJ Report

活動報告

中国

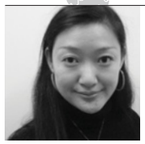
目に見えない傷を癒す 中国・四川での心のケア

現地の子どもたちの様子をお伝えします



母親を恋しがり、ボランティアに寄り添う女の子（2008年5月）





駐在スタッフ
志茂 雅子
Masako Shimo

『大好きなお姉ちゃんへ』震災後に書かれたある女の子の詩

今年2月、中国の正月である「春節」を迎えようとしたある日、14歳の女の子、忍冬（レントン）は詩を書きました。

『もうすぐ春節だけど／村はひっそり静まり返っています／あの日、何千、何万もの家が一瞬で倒れました／その時から家は／皆にとって特別な意味を持つようになりました』

忍冬は、昨年の四川大地震で被災し、その時に大好きな姉を失いました。

©Colin Crowley/Save the Children



廃墟となった小学校で途方にくれる男の子（2008年6月）

©Jon Bugge/Save the Children



行方の分からない家族を探すため、掲示板には数えきれない張り紙が貼られていた（2008年5月）

©Colin Crowley/Save the Children



がれきが散らばる幼稚園の中庭（2008年5月）



震災後子どもたちはSCの設置した「希望の壁」で、お互いを励ますメッセージを交換した（2008年5月）

『お姉ちゃん／お姉ちゃんはいなくなってしまったけれど／お姉ちゃんの面影は私の目の前から消えません／（中略）／お母さんはお姉ちゃんの写真を全部しまってしまいました／写真を見て家族が悲しまないようにって／でもそうすればするほど／お姉ちゃんのことを全然忘れられなくなってしまいます／お姉ちゃんのいた頃の記憶は／とても美しくて／だから今お父さんとお母さんをまっすぐ見ることができません／お姉ちゃんがいなくなってから／私は2人の前でどういうふうに振舞ったらいいのか／全然わかりません』

2008年5月12日、忍冬と同じ様に被災した子どもたちは、突然襲った出来事にとまどい、苦しみました。

「どこに行けば家族に会えるの？」1人きりになり、言葉を失った女の子もいました。子どもたちは生き埋めの恐怖や、家族や友だちのいない喪失感、その後の不自由な生活により精神的な負担を強いられました。

調査で明らかになった子どもたちの心に残る苦しみ

震災から1年近く経った今年の4月。がれきや傾いた建物など、いまだに地震の爪痕が残る四川省安県の山間部の村、茶坪（チャピン）では、子どもたちの元気な声が響いていました。プレハブ校舎の空きスペースを利用して、のびのびと遊ぶ子どもたち。地面に絵を描いたり、石でおはじきをしたり、人なつこく近づいてくる子どもの様子は、一瞬、大人たちを安心させてくれました。

しかし彼らにアンケートをお願いすると、「外を1人で歩くのが怖い」「夜が怖い」と告白した子どもや、何かに追いかけられる夢を頻繁に見る子どももいました。

こういった地震の影響による子どもの内面の変化は表に出てこないので、周りの大人も見逃しがちです。忍冬のように、周りの大人に「自分のことで心配させたくない」と気を遣ったり、本音が言えなかったり、うまく表現出来ない子どももいるかもしれません。子どもたちが苦しみを1人で背負わず、自由に感情を表に出せるよう、セーブ・ザ・チルドレン（以下SC）では、心の傷を負った子どもたちへの心のケアを緊急支援活動の柱の1つとしています。


絵本の読み聞かせに、みんな夢中。聞き入る子どもたち

周りの大人の理解が子ども自身を安心させる

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下SCJ）の支援対象の中心は、雲南省で集団避難をしていた子どもたちです。彼らは震災のストレスに加え、住み慣れた土地と親元を離れ、方言も異なる土地での生活を送ったため、精神的な負担が大きく、敏感になっていました。心理ケアの専門家は、心と体をリラックスさせる体操やダンス、詩の創作や描画を通して、感情を自由に表現することを教えます。

「友達と力を合わせて、きれいな絵を描けて、とても嬉しい」と、ワークショップに参加した子どもたちは笑みをこぼしました。

「子どもが何を感じ、何を考えているか耳を傾けること、そして一方的に叱ったりせず、子どもの言動の意味を理解しようとすることが大切なんですね」と感想を述べてくれたのは、子どものケアに関する理解を深める大人向けの研修に参加した、小学校の女性教員です。「これからは子どもをもっとサポートしたい」と、自分の教育方針の見直しが出来たことに満足そうでした。

「過去の傷を蒸し返して自尊心を傷つけないこと、自信を育む環境を大人が作ることが、子どもの将来のためになると学びました」と応えてくれたのは、2児の母親。保護者を対象とした研修では、子どもとの接し方や家庭での応急処置に関して学んでもらいました。これらの心のケア事業は継続して行っていきます。

事業を通じて研修に参加した大人の被災者も、伴侶や子ども、職場の同僚などを亡くし、心に傷を負っていたり、亡くなった人の分まで頑張ろうと、責任とプレッシャーを感じていることがわかりました。そういった被災者のことも考慮しながら、子どもの心のケアと、子どもをサポートする環境作りを続けていきます。


トレーニング中。心と体をときほぐす


保護者向けトレーニングには、子どもと一緒に参加する母親の姿も

※SCJの四川大地震被災者支援は、皆さまからのご寄付とジャパン・プラットフォームの助成により実施しています。震災直後からたくさんの方々にご協力をいただいておりますことを、心から感謝いたします。

※本事業のほか、SCでは2008年の地震発生直後より、教育、保健・衛生、子ども保護の分野で支援活動を行っています。具体的には、プレハブ校舎の提供、学校教材の配布、幼児のための体の洗い場の提供、地域住民への子どもの保健衛生に関するトレーニングの実施、医師向けの医療器具の配布、子どもたちへの安全な遊び場の提供などです。また、今回の被災の教訓を生かし、今年4月からは防災のための活動を開始しました。子どもや子どもを取り巻く大人に対して、災害対応のためのトレーニングを実施しています。

※本文で取り上げた忍冬は仮名です。実際にSC支援を受けた14歳の女の子が書いた詩『新年の願いごと』からの抜粋です。

心のケアを中心に、これからも継続して支援を行います。


グループで1つ、作品を完成させた



子どもたちが輝いた快晴の1日（2009年5月31日　四川省安県の文化広場）

心のケアの一環として、被災した子どもたちが参加する大型フォーラム『愛があれば希望がある一明日はもっとよい日になる』が開催されました。震災から学び経験したことを、寸劇やパフォーマンスなどを通して披露しました。


志茂スタッフ（中央）と子どもたち


人気者の小学生ニョウニョウ（右）がステージに登場


蟹に扮した男の子たちのダンス


参加した子どもの数は600人

子どもたちからあなたへ

From Children
of all over the world

セーブ・ザ・チルドレンは今年、イギリスで誕生してから90年の節目の年を迎えました。
今号では、約120の国・地域の活動で出会った子どもや大人の声をお届けします。
ご紹介できるのはほんの一部ですが、
今まさにこの時を、それぞれの国で生きている子どもたちに、思いを馳せていただければ幸いです。



© Amadou Mbodj/Save the Children

「家の近くに診療所が建てられて、本当によかったです」生まれた直後、呼吸器の病気を思ったアグネスの愛娘は、専門家の治療を受けられるようになりました。(ルワンダ/乳幼児の生存に関わる医療活動)

「ニニ、何をのぞいているの?」昨年11月に起きた洪水直後、SCは救援物資とともに、心のケアのためのおもちゃのブロックも配布しました。(7歳、コロンビア/洪水被害者に対する緊急教育支援)



© Dan Alder/Save the Children



© Peter Caton

村に建てられた診療所で、ニシはとても可愛い女の赤ちゃんを授かりました。母子ともに健康です。(バングラデシュ/母子保健・医療へのアクセス改善)

SCの活動と出会ったサライは将来、看護師になって子どもの命を守りたいと思うようになりました。(13歳、シエラレオネ/子どもクラブの推進)

© Louise Dyring Nielson/Save the Children Denmark





© Amadou Mbodj/Save the Children

「お母さんが小さなお店を持てるようになったので、僕は学校に通えるようになりました」とジョゼフ。(8歳、ナイジェリア/貧困家庭への生計支援)

サルマは1年前、1日15時間、親元を離れて家事労働させられていたところを保護されました。「今は友達と学校に通うのが楽しい」(9歳、インド/児童の人身売買の撤廃)





© Caroline Trutmann/Save the Children

小さい頃、内戦で学校に行けなかったティナ。現在、1年で2年分を習得する学習プログラムで猛勉強しています。(15歳、アンゴラ/紛争の影響下にあった子どもの教育支援)



「私たちも学校に通えるようになりました」と、子どもたちの瞳はキラキラ輝いています。(アルバニア/少数民族に対する教育支援)

最近ヘラルドの嬉しいことは、担任の先生の教え方がわかりやすくなって、学校をやめるクラスメイトが減ったことです。(9歳、ニカラグア/教員の質の向上を目指す研修)





「宿題できた!」幼稚園に通えるようになったクリスチャンは描いた絵を誇らしげに見せてくれました。(6歳、コロンビア/障がいを持った子どもへの教育支援)

チポ(右)とテンダイ(左)は大の仲良し。「大人になったら、2人で八百屋さんになるの」今、幼稚園で数のかぞえ方を一生懸命勉強しています。(5歳、ジンバブエ/就学前の教育支援)





© Colin Crowley/Save the Children

重度の栄養不良で外来治療センターに運ばれたアラミツは、1週間で笑顔を見せるまでになり、食欲も出てきました。(4歳、エチオピア/飢餓に対する緊急支援・栄養改善)



© Zhao Guanshen/Save the Children

「配ってくれた毛糸の帽子は、厳しい寒さから子どもを温かく守ってくれます」(チベット/乳幼児の生存に関わる活動)

※子どもたちの声は2008年の活動を中心に集めました
※子どもの保護のため、一部の子どもは仮名になっています

Toy Box
中国のおもちゃ箱



遊ぶことは学ぶこと。
遊びは子どもたちの笑顔を生み、協調性や創造性を豊かにします。
世界中の遊びや玩具を通して、子どもたちの世界を覗いてみましょう。



でんでん太鼓（だいこ）

回すと軽快な音が鳴る。写真は四川省のもの。



羽根蹴り

数人で輪になり、手を使わず、足で蹴ってパスを回す。写真は北京のもの。

首振り人形

人形に触れると、胴と頭がユーモラスに動く。写真は広東省のもの。





吠え犬

頭を押すと、ワンワンと犬が吠えるような音がする。写真は山東省のもの。

投げ独楽（こま）

独楽が回っている時間の長さを競う。写真は木製で雲南省のもの。



鳥笛

土製で、吹くと鳥の鳴き声に似た音が鳴る。



風車（かざぐるま）

風を受けてくるくると回転する。今はプラスチックのものが主流になっている。

風車に羽根蹴り、独楽回し伝統玩具が大切にされる国

四大文明に数えられるなど、長い歴史を誇る中国。中でも風車や独楽は古くから親しまれてきた玩具です。また、「ジエンズ」と呼ばれる羽根蹴りは今でも一般的で、子どもから大人まで幅広く遊ばれています。ちなみに羽が小さいもののほうが、落下速度が速くなり難易度が増します。入手しやすい玩具なので、チャレンジしてみてはいかがでしょうか。

協力：日本玩具博物館

Stakeholder Interview 3
特別インタビュー



子どもとの共同作業でハッピーのおすそわけをしたい

親子で使えるスキンケア商品「ママ&キッズ」を製造、販売するナチュラルサイエンス。2006年以降、「スマイルキッズ・プロジェクト」を開催し、その収益金の一部がSCJに寄付されています。同社の代表取締役で、3人の子どもを持つ母親でもある小松令以子さんに、企業そしてご自身のお考えを聞きました。

株式会社ナチュラルサイエンス

代表取締役　社長 **小松令以子**氏 Reiko Komatsu

大人にはない子どもたちのピュアな心を守ることが私たち大人の重要な「使命」

3児の母である私は、どうしても母親、主婦目線で物事を見てしまうのですが、今の日本は少子化のせいか、子どもを大事に育て過ぎる傾向があるように感じます。子どもを大切に思う気持ちはわかりますが、もっとラフに子育てをしてもいいのではないでしょうか。子どもにしか出来ないことを体験させて、そこからさまざまなものを得てほしいと思っています。

2006年から毎年開催している「スマイルキッズ・プロジェクト」は、多くの方にハッピーをおすそわけしたい、子どもたちと共同作業がしたいという思いから始めました。子ども自身が母親のお腹にいたときの記憶を辿り、その様子を描いたものなど、大人ではなかなか表現できないピュアな子どもたちの感性を目の当たりにして、主催している私たちのほうが元気をもらっているんです。そして、そんな子どもの純粋さを壊さずにいることが、私たち大人の使命だと感じています。

親子でするスキンケアがスキンシップになりコミュニケーションになる

社会貢献は大上段から振りかざすものではなく、毎日の暮らしの中で自然発生的に行うものではないかと私は考えています。それぞれ自分が出来ることのワクを少しずつ広げ、当たり前のことを当たり前に行えばいいのではないでしょうか。

私たちが今後、より頻繁に実行していきたいのが、子どもを対象としたスキンケア教室。肌が潤った状態にあれば、母親も子どももストレスがかかりませんし、スキンシップをしていてもお互い心地いいはず。親子でスキンケアの知識を身に付けてもらいながら、子どもも大人も精神的にハッピーになってもらえるお手伝いがしたいですね。

「スマイルキッズ・プロジェクト」とは

0歳から12歳の子どもたちに「大好き！」というテーマで絵を募集するイベントです。大賞作品はママ&キッズの乳液「オリゴミルク」のボトルにプリントし、限定発売されます。この収益金の一部は、SCJに寄付されています。写真は第3回大賞、井上拓人くん（当時5歳）の作品が入ったもの。





セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
事業部 アジアII

吉田克弥
Katsuya Yoshida

活動の一番の目的は支援国の人々にとって不必要な存在になること

子どもが生まれたことで「子どもを取り巻く環境をより身近に感じるようになった」という吉田スタッフ。NGO団体での現場経験を生かし現在アジアでの支援を担当する彼が、子どもたちや支援活動への思いを語ります。

困難な状況で懸命に生きる人々に接し勇気をもらうことも

支援活動は、3、4年などの期間が定められていることがほとんどですが、ゼロから何かを作り上げるには非常に短い時間です。例えば、3年で地雷回避教育を浸透させたり、地雷や不発弾をすべて除去することは不可能です。私たちが去った後は現地の人たちが自分たちだけで活動を続けていかなければなりません。主役はあくまでも現地の人々。支援国の人に「あなたたちはもう必要ないですよ」と言ってもらうことが、活動をする上での一番の目的だと思います。

以前所属していたNGOで、アンゴラの地雷回避教育業務を行っていた時、私は現地のスタッフに、「私たちは3年後にいなくなる。その後はあなたたちだけで活動していけるようにサポートすることが、私たちの役目なんです」ということを、当初から言い続けていました。実際、私たちによる事業は3年で終了しましたが、その後、彼らは自分たちで新しいスポンサーを探し、今も活動を続けています。一つの目的、価値観を共有出来て、それが形になったとても嬉しい経験でした。困難な状況で生きる人たちと出会い、私たちのほうが勇気をもらいました。

何も出来ないことを痛感生活力が優れた現地の方に助けられることも

私が最初に働いたNGOでギニアビサウ共和国に滞在していた時、自分が「何も出来ない」ことを痛感しました。伝染病に関する知識の調査を行うために自転車で村を回っていたのですが、その自転車はボロボロで、すぐにパンクしてしまいました。修理の方法もわからない、そもそも修理をするための工具もない。困っていると、近くにいた現地の人がいとも簡単に直してくれたのです。

井戸から水を運ぶ時も私は四苦八苦でしたが、地元の女性たちは軽々と頭の上に乗せて運んでいました。金銭的には貧しい国なのに、生活力は彼らのほうがずっと優れていることを実感し、「貧しさ」とは何だろうと考えさせられました。



吉田スタッフとヨルダンの子どもたち

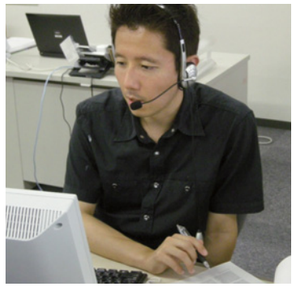
父親になったことで子どもを取り巻く環境をより身近に感じるように

国際的な仕事に憧れて語学を学び、ポルトガル語の勉強を通してアフリカの貧困問題に興味を持ちました。大学卒業後、NGO団体に入り、海外駐在を経て2008年3月にSCJで働くようになったのですが、それには理由があります。

その前年、自分が父親になることがわかり、子どもを取り巻く問題をより身近なものとして捉えられるようになったのです。それに加え、海外駐在当時、自分だけの力では何もすることが出来なかった子どもたちと、これから生まれてくる自分の子どもとが重なり、「子どもたちのために何かがしたい」と強く思うようになったのです。それが入局したきっかけでした。

現在、事業部でアジアの事業を担当しています。政府や国連をはじめ、企業や個人の皆さまからの助成金や寄付金が、現場でどのように使われているか確認し、報告するのが主な仕事です。裏方的な役目ではありますが、支援者の方に貴重な寄付金がどのように使われているかお伝えするのはとても大切なこと。現場での支援と並ぶ、もう一つのフロントラインの仕事だということを意識しながら、日々、懸命に取り組んでいます。

東京オフィスで現地スタッフとの打ち合わせ



自宅にて。子育てに奮闘中



Information

毎日をポジティブに、楽しく過ごす「Francfranc School」開校中

株式会社バルス様は、2010年3月まで毎月1回、女性のライフスタイルをサポートする新たな学びの場として「Francfranc School」を開校、参加費用の全額をご寄付くださいます。現代女性の知的好奇心を刺激するテーマを掲げ、毎回、多彩なゲストを講師に迎えて開催しています。

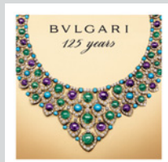
「Francfranc School」詳細：http://www.ff-school.com



木佐彩子さんと、第1回講師の知花くららさん

ブルガリ“スペシャル・チャリティー・コレクション”を公開

5月22日より一般公開が始まったBVLGARI初の回顧展（伊・ローマのパラッツオ・デルラ・エスポジツィオーネ美術館）において、“スペシャル・チャリティー・コレクション”が、541点に上るアーカイブと共に披露されました。本“スペシャル・チャリティー・コレクション”は全18点（ハイジュエリー11点と、7点の限定ウォッチ）。収益金は、すべてセーブ・ザ・チルドレンに寄附されます。



SCを通じた国際協力に関する教材を販売

8月1日より、世界の現状や国際協力に関する「Hi5ポスター教材」の販売を開始しました（税込2000円／ A2版両面カラー）。貧困や紛争などをテーマにした10種類から成っており、現地の写真や子どもたちの声をわかりやすく掲載しています。ご家庭や地域の子ども向けイベント、学校の授業などで、ぜひご活用ください。

お問い合わせ：SCJ事業部日本　03-6859-6869



世界のこと、日本のことがわかる

「平和」コンセプトTシャツ2009 8月中旬より発売

今年で7回目を迎えるキッズオンラインの「平和」コンセプトTシャツ。参加ブランドのデザイナーが「平和」へのメッセージを込めてTシャツをデザインします。売上の20%がセーブ・ザ・チルドレンのグローバル・キャンペーン、「Rewrite the Future ～いっしょに描こう！子どもの未来～」に寄付され、紛争下にある子どもたちへの教育支援に役立てられます。

キッズオンライン：http://www.kidsonline.co.jp

Topics／最近の出来事

～お伝えしたいことが、まだまだあります～

スリランカ、5月に内戦終結 避難民支援は今が正念場

「20年以上続いた内戦に苦い終止符が打たれたスリランカでは、30万の人々が国内難民となりました。難民キャンプは水も食料も不足し、戦場で凄惨な光景を目の当たりにした子どもたちは、心に深い傷を負っています。現地での支援活動は制約も多く容易ではありませんが、SCは生活物資の配布や子どもたちの心のケアなどの活動を行っています」



山本俊輔スタッフ

SCの子育て本、出版「ポジティブ・ディシプリンのすすめ」

SCJが監修した初の書籍「ポジティブ・ディシプリンのすすめ」が5月5日子どもの日に出版されました。手をあげたり、叱ったりではなく。でもしたい放題にさせるわけでもなく。日々の課題に子どもと同じ目線で向き合い、自信とちからを伸ばしていく。SCJはそんな「ポジティブ・ディシプリン」の子育てを、本書やセミナーを通じて、普及していきます。子育て中の方だけでなく、子どもの支援に関心がある方々もぜひ、ご一読ください。



お問い合わせ：
明石書店
03-5818-1171

全国の書店で販売中

World's Picture

どうしても載せたかった写真

モンゴルの子どもたち

渡邊唐子（SCJスタッフ）





（上）飾りを作る少女　（下）階段下に住む少年

首都ウランバートルから飛行機で1時間半、モンゴル最東部のドルノド県で撮影したものです。

上の写真の女の子は当時15歳。家族が遊牧生活をしているため、学校の隣の寮に住み、勉強をしながら職業訓練の一環で置物や飾りを作っています。家族と離れた生活ですが、「友達と一緒の部屋だし、勉強も出来るからさびしくない」と、はにかみながらも力強く答えてくれました。スタッフのデジカメに写る自分の姿に大笑いしたり、寮での生活や自分の作った飾りについて一生懸命説明してくれたのが印象に残っています。

下の写真は、遠くで遊ぶ他の子どもたちを大人びた表情で見つめていた男の子。声をかけると、彼が住む部屋に案内してくれました。階段下の、わずか4畳ほどの部屋が彼と家族の住居です。窓もなく、衛生的にも恵まれた環境ではありませんが、一緒に「かけっこ」をして遊ぶと、いきいきとした笑顔を見せてくれました。

恥ずかしがり屋だけれど、本当は遊んだり、話をすることが大好きな子どもたち。そんな子どもたちを目の当たりにして、子どもは「弱くて小さいもの」ではなく、「未来を作る、強くて大きい存在」なのだと実感しています。

Editor's Note

編集後記

手前味噌以外の何ものでもありませんが、この度SCJが監修した「ポジティブ・ディシプリンのすすめ」は、よい本です。本を読んで思ったことは、子育ては子どもを変えることにも増して、大人が変わることが大切だということ。「親と子ども」という関係にプラスして、両者を「個性を持った人間どうし」と捉えて子育て論を展開しているところにも共感できました。6月、この本の著者であるジョーン・E・デュラント氏が来日しました。その温かく、はつらつとした人柄は、次号でご紹介します。お楽しみに。

岡田 茜（SCJスタッフ）

SCJ | 50 | 2009.8

Save the Children
JAPAN

発行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

www.savechildren.or.jp